



空を見る



川崎ゆきお

「最近、何が面白いですか？」

「面白いか」

「はい、何か楽しいことはありませんか」

「大概のことはやって来たからねえ、まあ出来ないことも多いが、最近では空だな」

「空」

「上にある空だよ」

「ああ、ありますねえ」

「まあ、部屋の中に居ても、窓があれば見えるがね。しかし、窓を開けても隣の家だ。そこで空が見える窓を探した」

「先生の家の中での話ですね」

「そうだ。すると便所の窓から空が見えることが分かった。建物と建物の間に隙間があってね。そこから空が見えるんだ」

「でも、狭い空ですねえ」

「ああ、井戸の底から見ているような空だ。長方形のフレームだがね。井の中の蛙大海を知らずだが、空は知っておる。こちらのほうが広がったりしてね」

「その空のどんなところが面白いのでしょうか」

「面白くはない。楽しくもない」

「はあ」

「ただ、これには奥行きがある」

「宇宙まで行ってしまいますからねえ」

「夜は星が見える。確かにあそこへは簡単には行けまい。まあ、夜もいいが、あまり変化はない。昼間の方が色々と変化が楽しめる」

「やはり楽しいのですね」

「妙な雲が浮かんでいるとね」

「はい」

「その雲の形は誰かが画いたものではない。まあ、絵としては画けんだろうねえ。昔の人は絵など観なくても、こんな名画が観られたんだよね。まあ、そんな感じで目に入れていたのかは別として」

「写真でも無理ですか」

「写真を見ている距離と空を見ている距離は違うんだ。写真だと近くを見ていることになる」

「大きなスクリーンで、かなり離れて見た場合はどうですか」

「だから、そんな作り物に飽きたから、空を見ているんだよ。生だよ。本物だよ」

「なるほど」

「便所の窓から西の空が見える。だから、夕焼け空を見るにはもってこいの場所だ。このときの変化は凄いよ。それに動きも早い」

「そうですねえ。空って静止画じゃないんですよね」

「雲は流れるし、明るさも変化する。特に夕方はね。当然空が不安定なときは、昼でも明るくな

ったり暗くなったりする」

「はい」

「退屈なのは曇りの日だな。ずっと真っ白なときがある。さすがにこれは見ようとは思わない。面白いのではなく、雲白いだ。まあ面が白いことでは同じだがな」

「そうですねえ」

「しかし、つまらん状態もあるから、いいんだ」

「でも、トイレの窓からじゃ、範囲が狭いでしょ」

「いや、かなり遠方が見えるので、そこそこ広い。ただ真上は見えん」

「面白いものを見つけましたねえ」

「まあな」

「君もやってみなさい」

「そうですねえ。空なんて最近見ていませんねえ。確かに上は見ますが、そんな目では見ていません。先生のように鑑賞するような感じでは」

「ふと上を見ると空があった。これが一番いいのかもしれないねえ」

「ふとですか」

「最近、ふとじゃなく、見よう見ようとするから、少し飽きてきた。やはり狙っちゃ駄目だなあ」

「もう、飽きてきたのですか」

「まあね」

「やはり、楽しみも常に変化するんですねえ」

「ああ、だから、楽しみと思わないで、そっとしておく方がいいようだな」

「はい」

了